

硝子玉の眼が、私を見ている。

視線が怖い。思えば、いつのころからだろうか。私は視線に敏感だった。不意に寒気がして振り向くと誰かがこちらを見ている、などというのは日常茶飯事で、ちよつとした嫌な予感がすれば誰かがこちらへ振り向こうとする所であるというのがわかる、というほどのものであった。

とはいっても人間の視線、というのはそれほど怖くない。だからまだ我慢できる。

本当に怖いのは——人形の眼。

人形は、何も見てはいない。しかし見ている。見ていない眼で、見ている。見ていないのに、見ているのだ。その動かない視線に、感情というものは無論こもりはしない。ただ、温度のない眼差しが、私へと突き刺さる。

本当の恐怖というものは、日常の繰り返しの中にこそ潜んでいる。ささいな雑音のように、しかし確実な存在感を持って、背後に忍び寄る。何をしてもないのに、背後にたたくずんでいる。ただ、そこにいる。それが一番恐ろしい。違和感のない日常の中に、不意に紛れ込む。安心の中に紛れ込む、一滴の不安。その繰り返し。無神経に、生活のリズムを乱す。攪乱する。そして——リズムは少しずつ狂っていく。時計の針が、ねじ曲がる。

不安は、おもむろに形を取り始めた。単なる影でしかなかったような不吉な予感が、明確な形を持って動き始めた。平穩な毎日のその水面下で何かが蠢いていた。あるいはその平穩というものは、日常という脆い上塗りが辛うじてその下の大きなうねりを隠していたに過ぎないのかもしれない。いずれにせよその穩やかさは、不意の衝撃で一瞬で凍り付いてしまいそうな、まるで過剰に冷やされた水のような危うさに満ちていた。

夜だった。あの夜を境にすべては変わってしまった。

暗い停電の部屋に——「それ」はいた。いや、あった。

空間が歪んでいるように思えた。

部屋の片隅に、「それ」は転がっていた。

「それ」は私の知っているよく似た誰かの姿をしていた。しかしながら「それ」は人間とは似て非なるものであった。なぜなら、「それ」は硝子玉の瞳でずっと私を見ていたのだから。瞬きもせずに私を見ていたのだ。冷たい肢体の不自然に曲がった関節もまた「それ」が人間でないことの証左であった。「それ」はあの人形の硝子玉の瞳で、私を見ていた。あの何も見ていない眼が私を見ていた。

世界が、ぐらりとゆれた。眩暈がした。おおよそ正常な思考の可能性を奪われた私には、その邪悪な視線から逃れるほかなかったのである——辛うじて「それ」を破壊し、隠蔽すること以外には、おそらく。

あの夜から、何かが変わりはじめたのだ。まるで、無限に続くドミノの最初の一枚が倒されたかのように、私の世界が変わっていった。いや、あるいは既にすべては変わりきってしまったのかもしれない。ただ、あまりの豹変に私の認識がついていかなかっただけで。あの日を境に、隣人は表情の下に隠された能面のような無表情を不意に見せるようになり、友人との会話にも不自然な沈黙が現れるようになった。まるで世界のすべての人間の中身が入れ替わったかのように、知人たちはまるで知らない人物へと変貌を遂げていった。ただ私だけが変容から取り残されるようであった。

もしかすれば、いつしか私は人形の世界へと紛れ込んでしまったのではないか。だとすれば、同胞を破壊した私を決して赦しなどしないだろう。

人気のない月夜に散歩する以外には、私は用事のあるとき以外には、滅多に外へ出ることもなくなった。それは、理解しがたい不気味な表情を浮かべる人々——あるいはもはや人ではないのかもしれないが——との直接的な接触を避けるといっただけでなく、もはや人間のものとは到底思えぬその温度のない視線を恐れたためであった。

ある月夜の晩に私が散歩をしていると、不意に誰かが後ろから私の肩を掴んだ。蠟のように白い腕であった。私はすんでの所で悲鳴を上げるところだった。振り返ると、くすんだ灰色のコートの男が二人立っていた。これといった特徴はないが、ただその目だけは違った。まるで暗がりの猫の眼のように異様に大きい黒目。そこには何の関心もなく、何も見てはいない眼で私を見ていた。背筋に冷たいものが走る。

……不意の眩暈。耳鳴り。

男は気遣う素振りも見せずに、ポケットから黒光りする手帳と、書類のようなものを取り出した。ゆっくりだがしかしひとつも無駄のないその手付きは、熟練の手品師のそれを

思わせた。そして私に見せながら言った。

——××さんだね。我々は警察だ。逮捕状が出ている。容疑は……わかるね？

男たちに乗せられた、行き先もわからない車の中で、これからいったいどうなるのかを考えていた。ひよつとすれば、これで私は永久に視線から解放されるのではないのではないか。狭い密室に閉じ込められ、あらゆる視線から隔離されるのであれば、それこそ私にとつては楽園のごときのものであろう。だから、未来の処遇に対してはさほど怯えていなかった。むしろ安堵を感じていたほどである。

しかし、それはあまりにも甘い考えだった。彼らが私を許すはずもなかったのだ。

あらゆる煩雑な手続き——手続きのようなもの、という風に言い換えた方が適切に思えるほど退屈な——が終わった後、私は当初予想していた通り、狭い密室に閉じ込められた。思っていたよりも若干広かったので、部屋に入ったときには随分良い待遇だと感心したが、だがその広さが何のためのものかわかった今は、そのおぞましき罰を計画した者の悪意に対して戦慄せざるを得ない。

——薄暗い部屋。

ベッドの影。あるいは、不意に日光が差し込んで生じる窓格子の日陰。ちよつとした風で揺らぐカーテンの影。そういったあらゆる暗闇から、彼らは私を覗いている。

静かに、私を見ている——わかっているのだ。これこそ、私への最良の罰に他ならないのだ。

皮肉な笑いに口が歪む。

そして——そうしたちよつとした動作さえも、見つめているのだ。硝子玉の眼、何も見ではない眼、暗闇に浮かぶ無数の人形の眼が、ずっと。

〈了〉